

## 田島先生の影

清水多吉

もしかすると、人は三〇才台、四〇才台の論文、著作が思い入れも深く、他人を動かす力もそれだけ大きいのではあるまいか。中年を過ぎてしまうと、さめた意識が強くなり、客観性が出てきて、情報としての知識の伝達という側面が強くなってくるものである。

私が現象学、実存主義に関心をもつようになったのは、一九五六年（昭和三十一年）のあのハンガリー動乱以後のことであった。当時、政治青年であった私は、ハンガリー動乱にショックをうけ、当時のサルトルの発言に大きく心動かされたものであった。それからしばらく、多分、昭和三五、六年頃まで、「実存主義かマルクス主義か」といったテーマは、当時の青年、学生たちの主要関心であったと思う。私自身もフランクフルト学派に出会うまで——実はマルクーゼのあの『理性と革命』は、昭和三三、四年段階で、ヘーゲルを論ずるにあたって、既に議論の対象にしていたのだが、どういう系譜の思想家なのかはまだよくわからなかった——、よくこの種の議論に割って入ったものであった。

この時の私の発言のネタが田島先生の諸論文、諸著作であったのは言うまでもない。後で聞いたところによれば、

ベルグソンからスタートし、フッサールに飛びついた若い日の田島先生の思いを、当時のサルトルはすべて代弁してくれていると感じたのだそうである。今から言えば、フランス実存主義に日本人が接するのは、あの時期が最初ではない。それ以前に敗戦直後の導入期があったのだが、この時期のものは文学者の手になるものが多く、当時の私も導入期のものを引っぱり出して読んでみたが、精緻な議論には不向きだと感じたことがある。この導入期のものに対して、第二期を代表する田島先生のは、オーソドックスな哲学者の手になるものであり、当時の哲学青年の格好のテキストになったと思う。実のところ、このことは、ドイツ哲学中心の日本の哲学、思想界で、フランス哲学への言及の出来る人がいかに少なかったかを物語ってもいる。したがって、議論をふっかけた相手のネタも田島先生のものであり、相互に底が知れたという場面もしばしばであった。サルトルの発言に心動かされながらも、当時の私は、現象学に行くことなく、初期のルカーチ経由でヘーゲルにまだまだとらわれていた。そのような次第であるので、昭和三〇年代の終り頃から、昭和四〇年代にかけての田島先生の一連の弁証法考察は座右の書にしていたものである。

昭和四一年、現代思想の動向を確認するため、私はドイツに留学した。政治青年のある種のセンチメンタル・ジャーニーでもあった。目的の一つに、放心状態の私にまばゆく映った『希望の原理』の著者エルンスト・ブロッホの咳に接するということがあった。ドイツにいる間もうすうすは感じていたのだが、ヘーゲル―マルクスの思考線は、大きくカーヴを描こうとしていた。日本に帰ってみると、あれほど熱狂していたサルトル熱はすっかり冷めていた。帰国の途中に寄ったパリでも、日本人留学生がしきりにサルトルの悪口を言っていたのが思い出されてならなかった。

帰国して間もなく、フランス思想界が実存主義から構造主義への転換をとげていることを知った。この知識もまた田島先生の諸論文、諸著作からであった。もっとも、この時は、私もまたドイツ思想界が、ヤスパース、ハイデッガーの時代からホルクハイマー、アドルノに代表されるフランクフルト学派の時代へと大転換をとげようとしていること

の原資料を手に入れていた。やがて、フランス構造主義に並立するのがドイツ・フランクフルト学派であることが国際的にも認知されるようになった。この時期の田島先生の論文、著作活動にはめざましいものがあった。もうこの頃は、私自身、日本の風土のなかでのフランクフルト学派の導入といったことを考えていたので、現象学に足を踏み入れることはなかったし、言語論、文化人類学的出自をもつ構造主義に心ひかれることもなかった。しかし、フランクフルト学派の論理を紹介するにあたっては、並立する構造主義を念頭に置いていなければならず、引き続き田島先生の論文、著作にはお世話になった。

昭和四五年、再び私はドイツに赴いた。今度は、はっきりした目的意識をもっていった。フランクフルト学派の代表的思想家ホルクハイマーをスイスのルガーノに尋ねることであった。だが、多くの成果を得られたにも拘らず、今回の旅は、フランクフルト学派第一世代の最晩年にあたっており、思想動向は第二世代のハーバーマスに焦点があてられていた。フランスでも構造主義からポスト構造主義への転回がとりざたされていた。この頃になると、日本のフランス哲学界でも、田島先生より若い世代の活躍が目立つようになってきていた。私と同世代の故丸山圭三郎氏、私より下の世代に属する今村仁司氏などである。この頃からようやく私の心の中のテキストは田島先生を離れ、これらの人々に移ることになる。しかし、あれから四半世紀の才月が流れ去った現存にいたるも、田島先生のテキストには「了解」が成り立ち、同輩、若い人たちのテキストには、何やら「怪訝さ」が先行するのはいなめない。

田島先生をお送りするにあたり、田島先生より遅れて哲学にこころざし、別な道を歩んだ一人の哲学青年に、田島先生がどのような影を落されたかを紹介することは、何よりも先生へのはなむけの言葉になるかと思われる。しかも、本学においていただいた三年間以前には、まったく個人的面識のなかった青年に絶大な影響を与えられたのである。先生の四〇年にも及ぶ著作活動は、言うならば戦後思想史のある側面を形成している。先生、ご自身はまだ回顧の時

期ではないと思っておられるようであるが、貴重な戦後思想史のある側面を是非にも活字にしておいていただきたいという思いやしきりである。